

主題 大学における看護学教育の検討

地域看護について

1) 地域看護—看護教育とのかかわりにおいて—

徳島大学教育学部 池川清子

地域看護という言葉が導入されて、数年が経過しているが、その概念規定は、いまだに曖昧である。そこでいま、地域看護というものを、「地域社会に生活している人びとを対象として行う看護活動である」と仮に規定しておこう。このように大枠に捉えたとしても、これまで公衆衛生看護といって、公衆衛生を住民に浸透させるための活動として称されてきたことに比べて、地域の人びとの必要に応える看護活動そのものであるという点で、看護の体系化への一步前進であろうかと受けとめている。したがって、地域看護は、今日の看護の概念からして、決して新しい領域とは言えないし、まして看護の専門領域などでもない。看護婦や保健婦による看護活動の、実践基盤の一つの転換に過ぎないと考えるからである。問題は看護教育にある。地域看護の概念を看護教育に十分に機能させるためには、看護婦教育と保健婦教育の一貫性が不可欠である。現行教員養成課程において、学生の地域での学習を可能とするのは、かろうじて成人看護学に位置づけられた保健所実習のみである。私の経験した限りでは、保健所実習は公衆衛生活動の臨地見学の域を出ておらず、地域看護を学ばせるという教育側のアプローチが十分であるとは考えがたい現状である。こういった観点から、大学における看護教育の体系は、地域看護の概念を基盤として再編成される必要があると考える。学生は地域での学習を通して、看護の対象となる人びとが、どこから来て、どこへ帰るのかを知る。継続看護の意味は、しばしば施設退院後の事後指導や管理の面で強調され勝ちであるが、重要なのは、人々の健康にかかわる生活の場としての地域看護からの継続の意味である。この学習の連続において、学生はなぜ患者がそのような行動をとるのか、なぜかれらが病気になったのか、かれらの健康回復にどのような因子が影響するかを、理解するのである。

以上のような見地に立って、今回は、本学における保健所実習の現状分析から、地域看護実習のありかた、特に地域看護の実践を通して、学生が何を学ぶべきかを検討したいと考えている。

参考文献：①W, H, O 専門家委員会報告書, 松野かほる訳「地域看護」日本公衆衛生協会 1977

②The Third International Seminar, Effective Primary Care in
Community Health Service, Life planning Center, Tokyo 1977.

2) 大学における地域看護教育

訪問看護の問題点と展望

千葉大学教育学部看護課程 宮崎和子

はじめに

「地域看護」という概念には、「公衆衛生看護」「訪問看護」「在宅看護」「継続看護」さらに、「Primary Health Care」というように、さまざまな立場からの発言が含まれており、それぞれの把え方、用い方にも相違があるようである。

第2次世界大戦後、地域における看護は結核予防対策を中心に、国民保健向上の施策としてすすめられた。保健所保健婦の仕事は、衛生思想の普及および疾病の予防、健康増進に資する活動であり、すでに病気になってしまった病人の直接ケアは保健所本来の業務ではなかった。保健婦規則にも、疾病予防の指導、母性または乳幼児の保健衛生指導、傷病者の療養補導、その他日常生活上必要な保健衛生指導をするものとなっており、療養上の世話をなすという役割は期待されていないことが明らかである。

今日、人口老令化に伴ない、施設内に老人患者が多くなり、多くの病院で老人病棟化の現象がある。急性期を過ぎ固定期に入った患者、後遺症のため手のかかる患者は退院を勧告される。また、看護力の不足から、徐々に病気の進行する慢性難病患者も在宅療養を余儀なくされている。地域に帰した老人患者、難病患者、身心障害者などの看護の担い手は誰なのか、これらの患者は年々増加しており、核家族化の定着（全国平均一世帯当り人口3.28人S5 3.7）により、家族の背負いきれない医療看護上の諸問題が多い。さらに環境汚染その他の公害問題等、地域保健に関する社会からの要求もますます増しており、地域保健ならびに地域看護の問題は山積している。

地域看護の教育課程編成にあたって

J. S. Brunerは、教材の根底にある構造に忠実な教育課程を編成するために、どの特定の学科の場合にも、その分野で高度の洞察力と能力をもった人で、その分野の基本性質を正しく評価し理解できる立場にある専門学者によってもっともよい決定ができると述べているが、前述したように地域看護には様々な立場（分野）があり、それぞれに深い専門的知識とその分野での高度な洞察力を高めたものが大学教育における教育課程の編成や教材の精撰にあたるべきであることは言をまたない。その意味では地域看護のそれぞれの分野での教材の深い追究により、その根底にある構造を見抜く作業が大学における教育者に課せられた問題であろう。

前述したような様々な要因から、地域看護に関する社会のニーズは多様で、量的にも質的にも変化している。一方、医療の進歩と共に施設内看護技術も高められている。これらの実態より、従来の地域看護専門家のみならず、施設内看護（病院内看護婦）からの援助を必要とすることも多く、施設内外から協同する形で新しい地域看護の方法論がうち立てられなければならないであろう。私は成人看護の立場から施設内よりの継続看護・訪問看護に関する実状と問題点をさぐり、地域看護教育の中でどう位置づけるかを考察する。

3) 成人看護における患者のニーズを中心として

熊本大学教育学部 ○城 慶子
河 瀬 比佐子

近年地域看護という言葉がいろいろな所で使われている。日本看護学会においても1974年より地域看護分科会が発足した。しかし地域看護に対する理解については、必ずしも看護界において共通の基盤にたっているとはいえないのが現状である。それは日本の医療全体においても言えることであるが、総合的で一貫性のある地域保健、あるいは地域医療を推し進めてゆくために看護はその主要な役割を分担し、機能を発揮しなければならない。しかし日本の現状においては看護婦、助産婦、保健婦等職種の違いや所属する機関の目的及び活動の分野の違い、あるいは日本の医療のシステム上の問題等の影響をうけ、基本となる考え方は勿論のこと、その活動にも一貫性を欠き、無駄な重複やすき間を生じているのが現状である。

地域看護の最も基本的なことは、その地域の特性を背景として生活し、影響し合っている地域住民を対象とすることである。看護の対象である住民は個人としても、家族、地域集団の一員としても健康上の基本的ニーズを持っていることは言うまでもない。それぞれのニーズに対して必要な看護が適切な場所で、適切な人によって、適切な時に得られ、それが継続されるような活動が地域看護であると考えられる。地域ぐるみの看護を考えることが住民のニーズに最もよく答え得るものであるとすれば、問題はその基本的な考え方、あるいは対象のとらえ方であり、看護の機能がよりよく発揮されるようなシステムである。即ち病院に入院している患者個人も、家族も、地域で生活している人達も、相互に影響し合いながらどのようなニーズを持ち、またそれに対して如何なる援助ができるかを知らなければならない。またその援助は対象のニーズの個別性によって誰が分担するのが最も適切であるかを判断し看護のルートにのせてゆくことである。

今回の地域看護というテーマを、大学におけるカリキュラムの検討の中で、成人看護における患者のニーズを中心として、臨床看護の立場から考えてみることにした。

成人看護実習において過去5年間に学生の受持ったケースの中から看護上の問題点、患者のニーズ、社会的背景と問題点との関連などについて分析し、考察を加え対象の実態そのものが求める看護は、当然家族とか地域の中で考えてゆくべきであることを明らかにしてゆくことにした。それはまた基本的考え方や判断に基づく看護についての学生の能力を養い、地域における看護のあり方を把握出来るような方向づけのための基本的資料として検討した。

4) 地域看護実習の実情と今後の方向

弘前大学教育学部 津 島 津

目的：当課程で学生に実施した地域看護実習を年次別に検討し、今後の方向を考察した。

方法：保健所の実習において実施した実習計画及び実習記録・指導内容を年次別に比較検討した。

成績：昭和45年度は健康な対象を知る目的で、3年次の学生に実習をさせたが、健康障害者に対して援助できる知識や技術が充分でないために、自主的な展開ができなかった。健康者に対する健康保持増進の援助と保健活動の理解については目的を果し得たと考えられる。46年度から51年度までは4年次の学生に、住民の生活に直接に触れる実習方法をとった。学生に単独で家庭訪問を行わせ、それらの事例について事例研究会を開催したが、既に病院実習で生活の援助及び指導方法を経験していたので、在宅患者にこれを適用することができ効果があった。更に52年度は、4年次学生に保健所及び地域婦人部と協力して、家庭訪問の際に健康調査を実施させたが、地域住民の健康上の諸問題を把握するのに役立った。また援助を必要とした事例についてはそれを記録させ、保健婦に引継ぎ活動を継続させた。このような地域住民に対する一連の看護活動を実際に体験したことは意義のあるものであった。

結論：3年次学生に地域看護実習を行っても看護の知識・技術が共に不十分で、単なる見学となる傾向があり、自主的な実習ができない傾向があった。これに対して4年次の学生では地域住民の生活に触れることができ、地域住民に対する看護の重要性を深く理解することができた。健康のあらゆるレベルに適應できる看護、即ち総合看護を理解するために地域看護実習は大きな意義があると考えられる。

実習においては地域住民の生活に密着した実習方法が望まれるが、今後は保健所を中心として、一定のfieldをもち、健康調査から把握された問題点に基づいて、家庭訪問や健康相談、集団指導等を実習にとり入れ住民に対する継続的な地域看護実習を実施していくべきであると考えられる。